



「彼の義体<sup>カラダ</sup>」

朱鷺田祐介

寂しい時は、彼の義体<sup>カラダ</sup>に入るの。

火星の高山地帯を踏破するために作られたマーシャン・アルピナー。力強い手足を持ち、強化された肺は火星の薄くて冷たい空気の中でも息切れしたりはしない。高山の過酷な環境で身体活動を維持するために、新陳代謝を高めているので、多少燃費は悪いけれど、生の体<sup>カラダ</sup>／生体義体<sup>バイオモーター</sup>で、太陽系最高峰のオリンポス山を歩き回れるのは素晴らしいことだ。

私は、彼の義体<sup>カラダ</sup>を着装して／着て、山を歩く。

\*

大破壊<sup>A</sup>後10年<sup>F</sup>、人類が魂<sup>エゴ</sup>をデジタル化して、バックアップできるとなると、すでに数十年が経過していた。身体<sup>モト</sup>形状<sup>フ</sup>は

義体モイフと呼ばれる、一時的な乗り物になつた。バイオ技術の発達で病気を克服し、必要に応じて義体モイフを乗り換えることで、事実上の不死を手に入れ、超トランスヒューマン・人類と呼ばれるに至つていた。

\*

私が今、着ている彼の義体カラダ／マーシヤン・アルピナーは彼のオリジナルの肉体／スプライサー／遺伝子調整型生体義体バイオモイフではない。マーシヤン・アルピナー造形タイプ「MA 299」。外見上、コーカソイドの体格と金髪碧眼、濃い髭を持つているが、内臓や皮膚、特に呼吸器系は、高地順応したネパール人の肺と循環器系を参考に再デザインされたものだ。彼の本来の肉体は、地球の滅亡／「大破壊ザ・ブレイク」とともに失われ、地球で死んだ彼の魂ココロはこの火星で、バックアップから蘇つた。火星の辺境を巡回する保安官として貸し与えられた、このマーシヤン・アルピナー義体カラダに入り、四年間働いた後、着慣れた義体モイフを買い取つた。

ふと、口が寂しくなる。

煙草が吸いたい。

彼には喫煙の悪癖があり、それはこの義体カフラダに染み付いている。たとえ、彼の魂エゴが宿つていなくても、義体モイフが煙草を求めめるのだ。無意識に、腰の装備パックを採って煙草を取り出す。

マルボロ。イギリスのフィリップ・モリス社のフィルター付き煙草。

宇宙時代になって、ハビタット宇宙居住区の空気を汚す煙草は贅沢な嗜好品となったが、彼はやめられなかった。ありがたいことに、火星だけは喫煙に寛容だった。温室ガスが不足している、というのが理由で、野外であれば、自由に喫煙が出来たし、万能合成器で煙草を合成するための設計ブループリント図も多数、流通していた。フィリップ・モリス社の生き残りは同社の煙草のすべてを再現できるラインナップを安価に提供している。

私も、本来のエグザルト義体モイフ／交渉用の高級生体義体バイオモイフに入っている時は、煙草を吸わないし、その匂いもそれほど好きではなかった。

だが、こうして、彼の義体カフラダをまとって野外で吸うマルボロは別だ。甘い煙が肺に満ち、心が落ち着いていくのが分かる。オリンポス山の冷たい山肌に立ち、赤い荒野を見ながら、一服することができる今ならば、彼の苦言も聞き流せただろう。

火星の紫色の空へ向かって紫煙を吐き出す。

温かい煙は火星の冷たく薄い大気／温度はほぼ氷点下5度／気圧は地球の半分／の中



(NinchenBln を著作者とするこの 作品 は クリエイティブ・コモンズの

表示 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています)



で、すみやかに薄れていく。21世紀初頭の映画で見たように、綺麗な輪を描いてはくれない。

それでも、大気に混じった煙草の香りは、彼を思い出させる。それは彼の匂い。

彼の魂は、今、ここにはいない。

彼がエゴキヤストしてもう二ヶ月になる。

彼は義体<sup>カラダ</sup>／使い慣れたマーシヤン・アルピナー／私が愛した肉体をボディバンクに売り払い、小惑星帯<sup>ト</sup>に去っていった。エゴキヤスト後、この義体<sup>モイ</sup>に残された彼の魂<sup>エゴ</sup>のバックアップは消去され、義体<sup>カラダ</sup>は空白の器になった。私はボディバンクから彼の義体<sup>カラダ</sup>を買取り、保存することに決めた。オリンポス・シテイでそれなりの重職にある私には高価なマーシヤン・アルピナーでさえ、ポケットマネーで購入できるのだ。

何度か、この義体<sup>カラダ</sup>に、別の魂<sup>エゴ</sup>を入れることも考えたが、それは彼じゃないとすぐに気づいた。AIでもダメ。彼でなくては。

せめて、彼の魂<sup>エゴ</sup>のコピー／分岐体<sup>フオーク</sup>があれば。

アルファとは言わない。彼の心が感じられるならば、ベータでもいい。

確か、裏稼業の仕事で、魂をさらってきってくれる者がいると聞いたことがある。いえ、それはダメ。だつて。

寂しい時は、彼の義体カラダに入るの。

彼の指、彼の手、彼の体。

あの日、私と彼はここで諍いを起こした。彼は痲癩を起こし、私も彼を侮辱した。彼は私を撃ち殺し、火星から去つていった。

私は大脳皮質記録装置スネッに記録された魂エゴから戻ってきたが、すでに、彼はこの義体カラダを売り払い、小惑星帯のどこかに去つた後だつた。

彼はもう戻つてこない。

義体カラダを売り払つたのがその決意の証。

だから、追いかけてはしない。

だけど。

寂しい時は、彼の義体カラダに入るの。

(終)



Eclipse Phase は、Posthuman Studios LLC の登録商標です。本作品はクリエイティブ・コモンズ『表示 - 非営利 - 継承 3.0 Unported』ライセンスのもとに作成されています。ライセンスの詳細については、以下をご覧ください。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>